



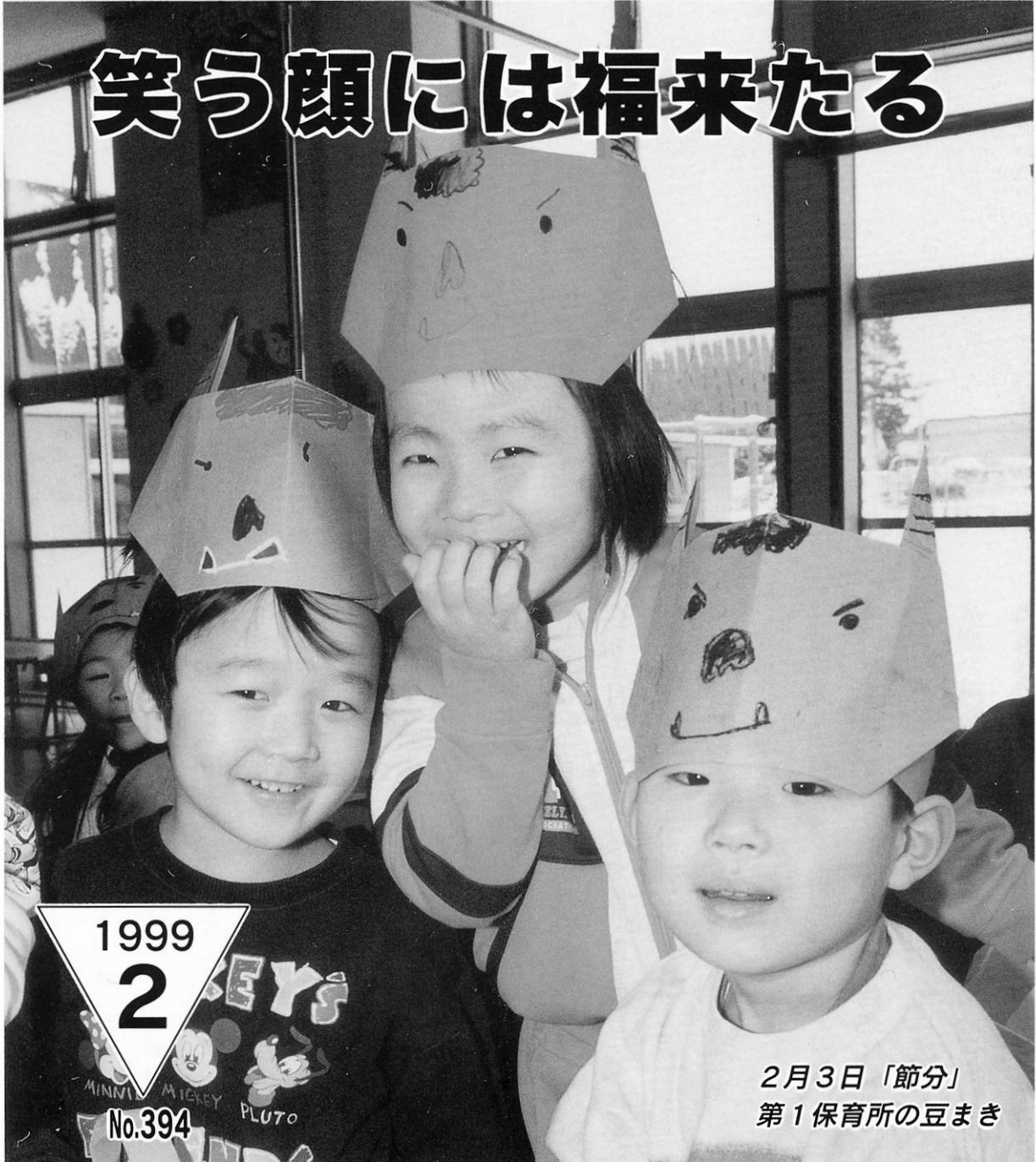
広報

かなぎ

編集と発行

金木町企画室

青森県北津軽郡金木町
大字金木字朝日山323
電話☎2111 内線240



笑う顔には福来たる

1999

2

No.394

2月3日「節分」
第1保育所の豆まき

昨年七月、文化観光立県を宣言した青森県。

春の桜祭り、夏のねぶた祭り、秋の紅葉、そして冬の……。季節ごとのイベントは年間を通して各市町村で、地域性を生かしながら独自に取り組んでいます。しかし、悩みの種となっているのが冬のイベントです。雪による寒さや交通機関の遮断などが、知らず知らずのうちに観光客の足を遠ざけていました。

県でも、これまで以上に冬季イベントに力を入れていきたいということから今年初めて、この二月に「十和田湖冬物語」を開催しました。観光を目的としたものでは「雪まつり」が代表とされますが、各市町村で容易にできることではありません。

金木町も以前までは、雪解けとともに農作業準備に入り、桜祭りを楽しみ、田植えを行い、暑い夏を迎え夏祭りに酔いしれ、秋にはたわわに実った稲を刈り取り、一年の収穫に感謝しながら、秋風を肌に感じはじめたころ、それぞれの家庭では冬支度に入ります。厳しい冬（雪）

に備えて強風や吹雪から家を守る。"カッチョ"と呼ばれる防雪さくを組み立て、家長である父親は農閑期に職を求め出稼ぎに行きます。家族にとっても、じっと待つことを余儀無くされ、自然に町全体が静まり返り、ただただ春が来るのを待ち続ける季節が"冬"でした。

活気がない、暗い、そんなイメージを一掃しようとして、一人の方が立ち上がりました。

「津軽の冬を、金木の地吹雪をPRし、観光の目玉にしよう」と、だれも気付かず、だれも踏み込まなかった一線を、「無理だ」とする逆風にもめげず勇気と情熱を持ち続け、頼れる仲間たちとともに乗り越えました。

ご存じ「地吹雪体験ツアー」。押しも押されぬ冬の一大イベントとなった今、このツアーに注がれる視線は熱く光り輝いています。

冬季観光の先駆けとして、また海外からも観光客が足を運ぶまでに知れ渡った地吹雪体験ツアーの誕生を紹介します。

雪に触れ、雪に親しみ、雪を楽しむ

地吹雪体験ツアー

津軽の風物詩

ストーブ列車

津軽地吹雪会 スタッフ



小田桐清衛門さん

突然の依頼にビックリしたものの、町おこしに頑張ろうとしている願いを聞いて協力しなければと思った。東京まで馬を連れていきPRしたところなど思い出もいっぱいある。これが無くなればすべてを失



▲6代目金太郎が引く馬ソリを楽しむ参加者
これがないと体験ツアーは語れない



▲ツアー期間中の無事を祈る安全祈願祭



▲スタッフの手を借り、地吹雪ルックに変身

出会い

ふれあい

そして…

雪へのこだわり

作家・太宰治が昭和十九年、生まれ育った津軽地方を旅し、描いた作品『津軽』。その冒頭に出てくる「こな雪、つぶ雪、わた雪、みず雪、かた雪、ざらめ雪、こおり雪」というくだり、「津軽には七つの雪が降る…」とヒットした歌。これらの雪を活用し、町の活性化を図ろうと思いついた方が「地吹雪体験ツアー」を企画、運営する津軽地吹雪会代表である角田周さん。しかし、はじめは「そんなことをして何になる」などの痛烈な批判を浴びていました。

最初の地吹雪体験ツアーが行われたのが昭和六十三年一月下旬。角田さんは、七つの雪を観光の一つとして売り込もうと旅行者にアタックしましたが、ほどよく断られて

作家・太宰治が昭和十九年、生まれ育った津軽地方を旅し、描いた作品『津軽』。その冒頭に出てくる「こな雪、つぶ雪、わた雪、みず雪、かた雪、ざらめ雪、こおり雪」というくだり、「津軽には七つの雪が降る…」とヒットした歌。これらの雪を活用し、町の活性化を図ろうと思いついた方が「地吹雪体験ツアー」を企画、運営する津軽地吹雪会代表である角田周さん。しかし、はじめは「そんなことをして何になる」などの痛烈な批判を浴びていました。

最初の地吹雪体験ツアーが行われたのが昭和六十三年一月下旬。角田さんは、七つの雪を観光の一つとして売り込もうと旅行者にアタックしましたが、ほどよく断られて

試行錯誤を重ねながら思い付いたのが地吹雪でした。津軽の冬の厄介者“と表現されるところでも嫌われ、できることなら無い方がいいと言われている地吹雪に着目しました。まず知人たちにその思いを語ったものの、だれもが首を縦に振る人がいませんでした。当時、県ではもちろん金木町でも雇用促進、若者定住のためにと企業誘致に力を入れていました。昭和六十二年当時、商工観光課長をしていた伊藤徳衛さんは「企業誘致は当時の課題だった。雪はマイナスイメージでしかなく、ましてや地吹雪を町の宣伝になどは…」と立場上、苦しかった胸の内を語っていました。

う、そんな気持ちで十二年間携わってきました。



原 慶子 さん

モンペおばさんとして親しまれ、ストープ列車のアイドリングな存在。今では、こなしきれないほどのお客様が来るようになり感無量の思い。写真のやり取りなどをして文通が始まったり、「また来ましたよ」と、言われるとやっつてよかったです。



木下きり子 さん

飲み物、食べ物のサービスだけではなく人と人の触れ合いを大切にしています。わずかな時間の列車内で、お客さんと一緒に歌を歌って盛り上がりたり、思い出は尽きません。地吹雪体験では、寒くてどうしようもないこともあったが、お客さんの笑顔がカバーしてくれます。

◀「レッツゴー」の合図で雪原ウォーキング



◀雪を楽しんだ後は、郷土料理・じゃっば汁に舌鼓



▶列車内は焼かれるイカの香ばしいにおいが漂う



▶約三十分の短い出会いの中でも、お客さんたちとの会話は楽しいひととき



仲間との出会い

花見が終わった五月ころ、角田さんは女性一人を含む四人で地域の活性化を目指し、幅広い活動をしたと町おこし団体「ラブリ一金木」を結成します。青年団的組織が無くなりつつあったこのころ、町おこしに一役買おうと仲間が結束、この出会いが後に、地吹雪体験ツアー誕生の糧となっていくます。

「地吹雪を観光の目玉にしたい」と言う角田さんの思い

を聞かされた三人は、実現に向けて動き出します。旅行業者へのアプローチや報道機関への宣伝、東京や大阪、南は九州にまで情報発信しながら

行政サイドにも足を運び、説得を続けました。そんな中、

県庁を訪れ際、応援してくれる人と出会います。「このツ

アー誕生の中で一番忘れられない人」と振り返るのが当時の

地域振興課長だった渡辺遥

さん。理解を示す人が現れ、

県からの協力を得ることができ

ました。

地吹雪体験ツアーが現実味

帯びてきたころ、さらなる

マスメディアへの宣伝をしな

ければとラブリ一金木のメン

バー一人と角田さんは上京し

ます。NHK、TBSなど全

国区の放送局へ懇願に歩きま

した。この時、先に述べた伊

藤さんが「やる気なら最後まで

で頑張れ、できる限りの応援はするから」と、旅費として二人にポケットマネーを手渡したそうです。

そうこうしているうちに、

ツアー客を受け入れてくれる

旅行代理店が弘南バスの協力で

見つけたり、本番での具体的な

な話し合いが持たれるようにな

りました。衣装は、来るお客

さんが首都圏からのツアー

であったため、身に着けたこ

ともなければ見たこともない

のではと、モンペ、かんじき、

角巻きからなる一昔前のスタ

イルに決定。「明るく楽しく

都会と田舎との交流のため」と

いう原点がここにあり、よ

そ行きのスタイルではなく、

津軽ならではのスタイルにこ

だわったようです。早速、町



成田 ユミさん

津軽弁のスペシャリストと言われる成田さん。以前、来てくれたお客さんがたくさん友達を連れて来て、私たちの顔を覚えていてくれるとうれしくなります。列車内では津軽の方言を聞いてお酒を飲みながら、ゆったりとした気分になり車窓から見える風景に感動しています。



原田波津子さん

現代は、あまりにもせわしなく、そんな中で古風なものに興味を持つ人が津軽を訪れ、ダルマ型の石炭ストーブにいたり、ゴットンゴットン列車に揺られながら限られた時間を思う存分、楽しんでいきます。雪が降り続く限り、ストーブ列車がある限り続けてもらいたいイベントです。



今 節子さん

雪と一緒に遊んでいられるお客さん。全国中でここでしか乗れないストーブ列車。皆さんが「楽しかった」と思いうに残る旅の手助けをしています。喜んで帰ってもらえるのが何よりうれしいこと。地吹雪体験では本当に地吹雪になると、そそくさとバスに戻ってしまうこともあるんですよ。



木村 礼子さん

最初のころと同じ気配りと笑顔を忘れずにお客さんに接しています。日本全国さまざまなお客さんとの出会いが一番の思い出。嫌だったことは無いけれど、吹雪の時はつらかったこともあります。



太田 靖子さん

地元の人には厄介な雪、そして乗ることの少ないストーブ列車ですが、お客さんは「来て良かった。本当に楽しかった。ありがとう」と言ってくれます。手伝っていてうれしく思う瞬間です。いろいろな出会いがあり、自分自身でも楽しんでいきます。地吹雪会一の元気で会員を引っ張っています。



松川久美子さん

雪の降らない地から来るお客さんは、雪景色やダルマストーブにとっても感激しています。地吹雪体験、ストーブ列車は、雪の魅力と、一昔前の古き良き田舎の良さを味わえる唯一なものなのかと思っています。短い時間の中でも、たくさん思い出があります。

の広報で呼び掛け、借りたり譲り受けたり手作りをして衣装集めに奔走、これが今でも

使われている。地吹雪ルックとなり人気を博しています。

快晴が生んだ名脇役

ツアーの青写真もほぼ決まり、夢実現を一抹の不安を抱えながらも待っていました。本番前夜、角田さんはこれまで苦労を共にしてきた友人と語り合っていました。「もうそろそろ出発する時間だ」。初めてのツアー客が、東京の弘前間を走る弘南バス「ノクターン号」で訪れるため、その時間帯がとて気になっていたので、「じゃあ、あいつです」。

祈る角田さんの友人や知人、町の人たち約五十人が応援に駆け付けていました。四人でスタートしたころを思えば、心強い仲間の友情が陰でこのイベントを支えていたように思われます。

準備を整えたツアー客に、角田さんが「レッツゴー」の合図。思うように歩けず転ん

夢実現

準備万端、約二十人のツアー客を乗せたストーブ列車が予定通り到着し、バスに揺られながら体験会場の藤枝地区に向かいます。収穫を終えた水田地帯一面は白一色の銀世界、バスから降りた一行はスタッフの手を借りながら地吹雪ルックに変身。この時、このイベントを成功させたいと